
Muv-Luv experience

月と太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v e x p e r i e n c e

【Nコード】

N 2 8 9 9 Y

【作者名】

月と太陽

【あらすじ】

少年は子供から大人になる。

あの時夢見ていたのは、今の此の時の現実だっただろうか……。

生まれ、育ち、旅立ち、育み、終わる。

大学3年生の冬。

彼は人生の岐路に立たされていた――。

M u v — L u v e x p e r i e n c e 第一話 前編

見渡す限りの全ては黒炎に支配されていた。

鮮やかな夕焼けに染まった朱色に滲んだ赤色が溶けて混ざって見えた。

そこは見るからに市街地であった面影がある。

ボロボロに荒廃しようとも面影までは無くす事は不可能であった。人々が日常の営みを送っていたであろうごく普通の街。

いまや一つの人影も見当たらず、瓦礫の山と黒煙が無常に伴んでいるのみ。

M u v — L u v e x p e r i e n c e

第一話 前編

見覚えなどない、知らない景色だなぁとぼんやり取り留めのない言葉を頭に浮かべていた。

現状を整理しようとしても人間の核である脳が一切働かない、まるで自分の脳みそがグチョグチョにシェイクされてしまったかのよう。

それにしてもなんだか随分と高いところから見下ろしているみたいだ、なんて、見慣れた自らの背の高さからの風景とは全く別物に感じていた。

未だ睡魔から覚醒を果たしていない眼をしばたたくせる。
俺は一体全体何処で力付き寝ちまったのか。

（――昨日は宴会が終わった後どうしたんだっけか？ ああっと、確かタクシー捕まえて家まで帰ってから……）

「――全く、思い出せん……」

ベランダでも寝ちまったのか、俺。
にしては肌寒くないな。

この季節、夜間の外は極寒だし。

うーんと唸り声を上げながら、手を組んで天高く突き上げる。腕からだけじゃなく背中からもバキバキと音が鳴る。

筋肉こってんなぁ、あー無理な体制で寝てたのかね……。

……にしても凄かったなぁアレは。

何ていったけ？ ……ああそうか。
——狂犬だ。

まさかこの酒豪と呼ばれる俺を打ち倒すとは……。

暫しの間、昨日の記憶の糸を辿りながら簡単なストレッチをした後、後ろにあった背もたれに勢い良く乗りかかった。……ん？ 背もたれ？

「——っあえ？」

抜け落ちていた現実感が戻ってくる。耳に入る無機質な機械音と断続的な地響き。

『CPから各部隊に伝達！ 別働隊のBETA群は地下を移動し進行中だった模様！ 再度武装と配置の確認を求む！』

（あ？ 何だって？）

……可笑いぞ。何処だ此処？

——コックピット？

瞬間、思考が停止した。

もしやゲームの筐体にでも乗ったまま惰眠を貪ってたのか……。
もういい大人が……恥ずかしすぎるだろうが。

『ラウンド大隊全機に伝達！ 全員聞いていたな！ 愛しの恋人達がお出でになるぞ！ 残弾及び燃料を確認しておけ！ 各機前線を維持し展開。その後は各機の判断に任せる！』

隊長らしき壮年の男が突如眼前に出現し、喋り始める。
それに追隨して何もない空間から何十個ものモニターが並び出した。

『『『『『了解！』』』』』

(……おいおい、ノリノリだなあコイツらあ。 いい歳こいて戦争ごっこかよ)

二日酔いの行為症かズキズキ痛む頭を摩りながら苦笑を浮かべてた。

久しぶりに浴びるように酒を飲んだからだろうか。
ていうか正に浴びた。酒を頭から。

……にしてもスゲーリアルなコックピットだな、空中にモニター出現したよおい。

ゲーセンの箱物筐体っていやあ確かバルジャーノンだよな。
あれってこんなに本格的だったか？
しかも物凄くハイテクチックな仕様ばいし結構な金掛かってんだ
ろうなあ。

……まあ随分ゲーセンやらの娯楽とは遠ざかっていたしなあ、最

近の技術の進歩ってやつは一概に馬鹿にできんし……。

『——佐藤大尉！ 返信が無かった様だがどうかしたか？』

（……おう、先刻の隊長っぽい人に声掛けられた。うーん一応ノリを合わせないと失礼だよなあ多分）

「——いえ、隊長！ 此方は問題有りません」

『そうか。了解した——貴官には期待しているぞ』

ノイズ混じりの無線が途絶え眼前に映っていた画面ウィンドが同時に消失した。

（はあーすげえな。最近のゲーセンって）

おおかた酔っ払ってゲーセンに迷い込んだのであろうか？
考えたくもないが若くして夢遊病か。

……はあ、歳は無駄にとりたくはないなあ。

にしても何故バルジャーノンか……高校時代はよく入り浸っていたしなあ。昔の習性かねえ。

欠伸を二度繰り返し、何となく今自分が置かれている状況を理解し始める。

（えーと多分コレが機体本体の操作用でコレが武器のトリガーっと）

——スラスラと難なく機体の操作方法が頭に浮かんでくる。
どこことなく違和感を感じなくも無いがきつと昔の記憶が蘇ってい

るんだと納得しところ。

さつきから碌でも無い考えしか浮かばないし。

昔遊び親しんだ型遅れのバルジャーノンに近い構造で流石に基本的な操作方法までは一新されてないみたいで助かった。

『――大隊全機傾注！……箱舟は無事飛び去った。我らの任務は遂行されたも同然である。残すはバビロン作戦のみだ』

恐らくチーム戦の前哨戦があったらしい。

良く周りの機体を見渡すと全体的に装甲や部位が破損しているモノが多い。

ルールは持久戦とかなのだろうか？

『――貴官らは地球を救いし英雄として語り継がれるであろう。いいか最後の命令だ。――必ず生きて帰還するぞ』

――俄に地鳴りが激しくなる。一段と決定的に。

今しがたまで瓦礫しか一望できなかった地平線が徐々に歪に蜂起していく。

その様は黒い津波が押し寄せているようだった。

――ここは海上では決して無い、然らば海が見渡せる浜辺でも無かった。

「……おいおい懐かしの青春の1ページが間違ってなきゃ、バルジャーノンって対人ゲーじゃ無かったのか……」

彼は知る由もない、コレがゲームの範疇に当てはまる事など永遠に訪れはしないと。

『——っ総員、突撃いいいいいい！！！！』

一切の乱れの無かった隊列から一機また一機と黒い津波を目掛けて我先にと駆けていく。

——補給は十分では無い。

拠点防衛を主に戦闘を繰り返して、予備の弾倉も使い切っていた機体が大半を占めていた。

退路は途絶えまさに背水の陣であったのだ。

ならば答えは近接戦闘だ。

残された武装を使い生き残る道は片道切符の突撃しか無かった。

「……っと不味いよな、一人だけ静観なんて。期待取りに空気を読むか……。んじゃまーいっちょ行きますか！」

ペダルを思い切り踏み込み跳躍ユニットを最大点火、瞬時のうちに視界に映る映像が次々と加速度的に後方に流れていく。

「っうおおおお！！！！」

機体制御などのお構いなしの変態加速は相乗的にコックピット内に掛かるGも増大させていた。

（こ、こんな所も無駄にリアルなのかあああああよおおおお！！）

——本来対BETA戦での戦場では飛行は恙なく死に直結するモノである。

原因は光線級といわれるレーザー属種、高度1万mの標的に対し有効射程距離は30?。

決して味方誤射はしない。

正確無比な射撃に人類の叡智の結晶たる戦術機も敵いはしなかったのである。

この時辛くも運は味方をした。

幸運にも現在の戦域には光線級は存在をしてはいなかったのである。

高速噴射跳躍を繰り返しながら黒く染まった津波に近づくにつれ、その正体が図らずとも視認できていく。

——それは【化物】であった。

折り重なりながら我先にと進む姿は餌に群がるようで、意志がない人形の様に見えるながら生々しい造形がそれを打ち消していた。

歪な形をした奇形生物。人間が見て生理的に受け付けられない物体。

彼は——佐藤大和は——コレの正式名称を知らなかった。

だから【化物】としか表現出来なかったが、それは人類が皆抱く正常な認識でもあった。

異星起源種。

BETA: Beings of the Extra Terr
estrial origin which is Advers
ary of human race——『人類に敵対的な地球
外起源生命』

それがコレの【化物】の正体である。

「——っ気持ち悪いんだよおお！！！！ 化物があ！」

理由なく震えだした指を無理やり押さえ付け、トリガーを引き絞った。

自らに今一度摺りこませる。認識を。コレはゲームなのだ——

撃鉄は落とされた。

機械の金切り声を上げて87式突撃砲の砲身を伝い劣化ウラン弾は前方に鎮座する【化物】目掛けて余すことなく叩きつけられていく——。

M u v - L u v e x p e r i e n c e 第一話 後編

M u v - L u v e x p e r i e n c e

第一話 後編

せわしなく視線を全周に巡らせながら、大きく息を吐き出す。

不気味な化物共との交戦も漸く一段落ついた所だった。

何度か危ない場面があったがその尽くは直感的に判断し肉片に変えていった。

例えば蟹の化物は後方から出ていた顔らしき部分を徹底的に狙い撃ちし、甲羅を被ったような化物はがら空きである背後からの攻撃に終始し戦闘を重ね。

同時に対B E T A戦の戦術を構築していったのだ。

他にも多数小型の化物が襲いかかってきたが遠距離からの掃討を

念頭に置き距離を取り纏めてあしらっていた。

——この殆どは対BETA戦に於ける基本指針である。

要撃級の尾節に当たる顔は感覚器を成しており、此処を破損した要撃級は戦術機の正確な位置を知るすが失われる事になる。

突撃級も全面に展開する装甲殻は現存するBETAの内での最大の防御力を誇る。

しかし反面突撃しか攻撃方法が無いいため機動制御能力、特に旋回能力が低い。結果これを打ち倒すのならば背後に回りこみながら空きの背への攻撃が常套手段となる。

小型種への対応も言わずもがな、近距離でやりあったのならば手こずるのは必至であるが遠距離からの面制圧が効果的である。

通常ならば実戦に赴く大多数の衛士は生き抜く事だけに専念し命からがらそれを達成できるレベルなのだ。

——異常であると断言できるのであろう。

彼はまた一つ幸運に恵まれていたのだ。

天才的な空間把握能力、それは射撃能力を飛躍的に上げることに繋がっていた。

一番最初に衛士が手こずるのは敵との距離感である。

いくら訓練で経験を積んだとしてもそれは実戦になれば霧のように胡散してしまう。

結果、この世界にはある言葉が衛士の間で語り継がれている。

【死の三分の壁】と。

とはいえ安堵の息を吐いてばかりでもいられない状況であった。

故意では無いにしろ遭遇したほぼ全ての敵を弾薬を消費する攻撃方法をとってしまった。

——現在残弾総数はおおよそ戦闘開始時と同じ数を安全に遠距離で相手にするほどの余裕はあるはずがない。

「はあ、はあ、はあ……」

体の疲労も限界が近かった。

たかがゲームの遊びだと楽に鷹を括っていたのが地味に効いていたのだ。

体への負担を一切考慮せずに跳躍ユニットを使用し縦横無尽に駆け巡りすぎた。

無論その分の推進剤も使いきってしまったている。

額に滲んだ汗が頬を伝い滴り落ちていく。

——休んでばかりではられない。

今この時さえ敵は己の周囲をとり囲んでいるかもしれないのだから。

(……はっ、何ムキになってんだか……)

疲れたのならさっさと辞めてしまえばいいだけだ。

そう所詮は唯のゲームである。

そう止めてしまえば……。

(——くそっ、何で途中で切り上げらんねえんだよ)

コックピットを見渡しても何処にもそれらしきボタンが見当たらなかったのだ。

ならば無理やり強制的にコックピットをこじ開けて降りればいいじゃないか——それは取り返しが付かない気がしてどうしても躊躇してしまう。

人間としての本能がそれだけは絶対に止めろと耳元で囁いているのがハッキリと聞こえているのが分かる。

現実的じゃない。

んなことはわざわざ言われなくても重々承知だった。

すると残される最後の手段。

ゲームクリアか。

ゲームオーバーか。

どちらかの二択問題。

先ほどから戦闘の合間に起こっていた小休憩は殆どをこの考えを決行しようとし、そのすんでのところで取りやめるの繰り返しであった。

思考の泥沼に入ってしまった感覚。

知らずに悔し気に唇を噛み締めていた。

「――!?!」

唐突に背筋が寒くなった。

いいようもない怖気に襲われたのだ。
体中の毛が逆立つ。

――何かに後ろから見られてる？

次いでコックピット内にけたたましいアラーム音が鳴り響く、網膜投影には赤い矢印で右方向からの敵の接近を告げていた。

素早く近接戦闘に移らなくてはいけない……。

一瞬の軽巡の後、片手に突撃砲を持ち替え残った右腕で前腕部のナイフシースから65式近接戦闘短刀を取り出す。

「――っおおおらあああああああ!!!!」

この間約三秒、数時間の内に得た戦闘経験を生かし積極的に近距離武装を使用した。

――比較的凡庸性に優れる長刀では無く範囲の短い短刀を選択したのは、愚行に当てはまらなかった

――直感したのだ。

勘という物は決して馬鹿に出来ない存在であると彼は短い人生の中でその恩恵を授かってきた。

昔から人の考えを読むのが得意だった、餓鬼ながら人を見下していた時期があった。

本能的に知覚する事に秀でた人間は確実に在ずる。

それが彼——佐藤大和は普通の人間より少しばかり秀でていたのだ。

しかして予知する事柄は外れる事は無かった。

下半身のバランスを保ちながら絶妙に上半身のみを横に回転させた瞬間、視界に入ったのは戦闘中何度か見かけた赤い蜘蛛の造形をした化物、戦車級であった。

口元に嘲りの嘲笑を浮かべているかのような赤蜘蛛は周囲に散乱していた要撃級の死骸を足場にして個体では実現不可能な跳躍を成し遂げていた。

——異様な落ち着きを抱きながら冷静に推察できたのは視界一杯に広がる戦車級がとても滑稽に見えたからだ。

戦車級は腹部の口を大きく開け放ち今か今かと獲物が食いちぎれる瞬間を待ち得ていただろう。

だが残念だ、空中を浮遊していたら——逃げ場は無いだろう？

意趣返しに口元を三日月に歪め、一切の戸惑いをせず勢い良く短刀で赤蜘蛛の胴体を横払いに斬りつけた。

静止していた化物は綺麗に真っ二つにされながら濁った体液をまき散らし化物の残骸が横たわる地面を転がって――。

「――つくそがぁ！ この茶番はいつになったら終わんだよ！」

きつく拳を握り感情のまま乱暴に振り下ろした。

――コックピットの中は静まり返り機械音が鳴り響く。

随分前から酔いは覚めていた。現実感が伴っているのが嫌にでも分かってしまうのが恐ろしく、思考を停止させて余計な事は考える事をやめていたのだ。

だが限界だった。何時まで我慢すればいい？
ゆうにもう数時間は経っているだろう？

――時は満ちたよ。

「――っ……何だアレ？」

赤く染まった空は夕焼けを艶やかに。

——朱色に染まった雲が避けるように空が割れた。

——さあ。幕を上げましょう？

2001年 12月2日 午前6時 日本 神奈川県横浜市終町
高層マンション1007号室

「——あ……夢、か」

M u v - L u v e x p e r i e n c e 第二話 前編

「——ふぁっ」

鏡に反射して映るのは精悍な顔付きの美丈夫——などではなく、
瞼が重そうでボサボサの寝癖がトレードマークの己自身だったりし
た。

一際大きな欠伸を掌で隠すことなくかまし、洗面台に備え付けら
れているバルブを捻る。

「っうお。冷たっ」

——と銀色の蛇口から冷たいというか凍えるような冷水が勢い
良く流れだした。

（あー。……メンドイからこのままでもいいか）

わざわざお湯を沸かすのも面倒なので少しばかりの覚悟を持ち顔
面目掛けて一思いに水を掛けてやるのだった——。

M u v - L u v e x p e r i e n c e

第二話 前編

2001年 12月1日 午前7時30分 日本 神奈川県横浜
市終町 高層マンション1007号室

チンツと小刻みな音を立てトースターから食パンが顔を覗かせる。
科学の進歩はすげえなと思いながらこれまたインスタントなコー
ヒーの入ったコップにお湯を注ぐ。

そうしてバターを塗り下った熱々のトーストに齧り付きながら新
品のソファ―に腰掛けた。

この時間ならめざめるテレビが放送中だなど適当にチャンネル
を変えていくと。

『――御剣財閥は来年を目処に中国進出を計画し専門の現地法人
を設立することを……』

佐藤家定番の朝番組は日本を代表する財閥のニュースを取り上げ
ていた。

なにやら世界市場の動きを見ていち早く中国進出を試みているら
しい。

「――ふう。やっぱり美人アナウンサーは朝一で見ても可愛いよ
な」

まあこの男。んなことには一切興味は無いらしいが。

これでも一応は経済学部在籍なのだ。

時節は冬、12月の暦に入ったばかりである。

正月を前にして人は皆、今年の精算を完遂すべく四方に忙しなく走りまわる季節。

学生ならば進学の道か、若しくは社会人への道か。
そんな季節。

彼——佐藤大和は学生のカテゴリーに振り分けられる立場である。

大学三年生、しかも12月。

たいがいの学生ならば己の人生の指針が決まりきっている筈であるが。

「……教育実習生ねえ」

呟きはテレビから流れてくる陽気な音楽に打ち消され、スクリーンには本日のわんこのテロップが踊っていた。

白陵大付属柊学園。

神奈川県横浜市中区に位置し神奈川県有数の進学校として有名高等学校である。

白陵大学へのエスカレーター式の学校であり、抱える生徒数が多い。

いのも特徴の一つに挙げられる。

まあ何故んな説明を突然始めたかと言うと要するにソコに教育実習生として行くんですよね。俺。

発端は正月に毎年行われる定例親族会議。

大学卒業が近づいてきた俺は年に一度の会議で自らの進路を公言せにやならず。

未だに進路を決めかねているそんな俺に両親が業を煮やしたらしい。

ぶっちゃけ大学院にでも進んでまた暫く学生ライフをエンジョイしようかとも画策していたんだけど。

ともかく紆余曲折あり、俺は両親の兄が経営する学園に教育実習生として駆り出される事になった。

俺からみたら叔父に当たる、佐藤剛拳という人。

健全なる精神は研磨された体に宿るが信条の少し頭がお固い御仁。現代っ子な俺にしちゃ相当に相性の悪い人だ。

何故それで教育実習なのかという子供時代に「俺は先生になるんだー！」なんて考えて行動して周囲から神童扱いを受けるほどに勉強に没頭していた黒歴史なんかがあるんだが話が長くなるのでま

た今度って事で。

……分かったよ話しますよ。

あれですかCMとかで続きはネットとかは嫌なタイプですか。

簡単に話を要約すると昔、小学生時代に教師に惚れていて、その人に褒めてもらいたくて勉学に励んだ時期があったり無かったりした事を伯父さんが覚えていたらしい。

伯父さん曰くもう一度本気で教師を目指してみてもいいのでは？
だそうで。

その頃の俺が忘れられないらしく、伯父さんは俺を気にかけてくれているんだとか。

……黒歴史でも今となってはいい思い出だけだな。

おお、そろそろめざめるテレビが終わる頃か。

——どうやらない時間のようなだ。

雀の鳴き声が耳に心地良い清々しい朝を迎える。

伯父さんの学園までの道程はマンションからさほど遠くはないので教育実習生の間は徒歩で通勤することに決めていた。

東京の大学に通うときはいつも満員電車ですし詰めだったので新

鮮かつ、とても開放的で大変宜しい。

話は変わるが俺の実家は東京にあるため、この街に暮らすにあたって伯父さんがなんと部屋手配してくれた。

しかも家具付きだ。

まるで某レオ○レス並のサービス精神。

去年建設が終わったばかりという高層マンション。

二日前から寝泊まりしている一室だ。

たかがそこいらの大学生が借りれる家賃では無く。

それを無料で貸し出してくれる辺りは流石あの叔父としかしか言い用がないがな。

……あの性格で無けりゃ結構好きな部類に入る御人なのに。

(……まあ俺がどうこう言ってたって性格は変わらんか)

一ヶ月間という短い期間だが一応任される仕事は出来る範囲で全うしよう。

せっかく身の回りの世話まで見てくれてんだしな。

学園までの道程を一つ一つ確認しながら歩道を歩いて行く。

下見はまだ一度くらいしか行ってはいないからか少し記憶があやふやな感じた。

(えーと。確か前方に見える交差点を右に曲ってっ)

——見晴らしが悪いコンクリートの壁に囲まれた路地の道路。
聞いていた話では歩行者ばかりで車などは余り通らない場所らしい。

……はずなのだが。

「——って。真剣かよ、あれリムジンじゃねえか」

下町な風景には似合わない高級車が信号待ちをしている姿が。

赤信号が青に変わる。

黒光りのするリムジンは颯爽と道を曲って——。

「……は？」

——曲って、曲って、曲って行く。

いつまでもいつまでも車体が途切れることが無い。

数十秒の時間を掛けて車体を旋回させながら姿を消して行った。

明らかに壁を突き抜けていた様に見受けられた。

だってどうやって曲がったんだよ。

「——物理法則をぶち破ってなかったか今の」

交差点には啞然とした顔の男が一人取り残されていたとき。

M u v - L u v e x p e r i e n c e 第二話 後編

「——お久しぶりです。剛拳伯父さん」

「——うむ。久しいな、前に会ったのは去年の顔合わせの時からか」

指定された学校の玄関ホールで俺を待っていたのは叔父の秘書らしき眼鏡の似合う美人さんだった。

挨拶も程々に案内されたのは一際厳格な風格を放つ一室。顔を上げると予想通りの文字が。

——理事長室。

部屋へと通された俺は久方振りに叔父と再開していた——。

高級感漂うアンティークが施されたソファーへ座るように勧められ叔父と向かい合う形で席に着く。

「まあ茶でも飲みながら話をしようか。お主も聞きたいことが幾つかあるだろう」

後ろで控えていた秘書さんはいつの間に用意していたのかお茶を

二つお盆の上に持っていた。

見惚れるような作法で目の前のテーブルにお茶を置き、「何か御用がありましたらお呼び下さい」と退場していった。

「……ご配慮ありがとうございます」

取り残された俺に張り詰めた空気が肌を刺す。

二人になり尚更だ、いつもながらに慣れないなこれは……。

「ではまず簡単に今回の教育実習について説明しようか」

——このあらしは両親から聞き及んでいた通りだった。

未だ進路が定まっていない俺について両親から相談を受けた叔父は自分の学園で暫くの間預けてもらっても構わないと薦めたそうだ。もし教師になることが嫌だとしても誰かに教えるという経験は決してこれから無駄にはならないと重ねて言い含めて。

両親も叔父の性格は良く知っているため、快く任せることにしたそうだ。

……にしても無責任な親なこと。

「……ざつと説明するとこんな所か、一応教育実習と銘は打っているが大学の冬休みの時間を削るのだ。仕事に対する報酬は払う。衣食住も一切の心配は必要ない」

衣食住に関しても驚いていた所だったがまさか報酬まで用意してるとは……色々と出来ている御仁である。

「して大和、お主から何か質問はあるか？」

「……それでは一つだけ宜しいですか」

「うむ。答えられる範囲であるなら話そう」

——この話を聞いた時からずっと疑問が付き纏っていた。
何故ただの親戚の子供に対しここまでの配慮をしてくれるのか。

「叔父さんは何故私にそこまで肩入れしてくださるのでしょうか？」

「……………」

——なんの前触れもなく凝然と見つめられた。
片時も視線を外さず此方の奥の奥まで見通すかのように。

一体何分経過しただろうか。
もしかしたら何十分かも知れないし、数十秒かもしれない。
時計が静止したかのような感覚に陥っていた。
時計が進む音だけが耳に残っていた。

異様な迫力に飲まれそうに幾度もなったがその都度に自らを鼓舞した。

質問をしたのは此方で応えるのは向こうだ。
なら此方が非を感じることは決して無い。

これは――数少ない自分の中の固定されたルール。
……いや教えか。

「――っふ、それよ。それが答えだ」

「……はい？」

硬直がいつの間に溶けていた。
張り詰めた空気は胡散し叔父から唐突に声が掛けられる。

――先ほどまでとの雰囲気とはうってかわり懐かしいモノを愛
でるような顔し失笑を零していた。

「……変わってないという事だ大和よ。お主の根幹を成す部分の表面は時の移ろいと共に変質したのだろうが、その奥底に一切の陰りは見えん」

「……はあ」

全く雲を掴む如くに話が把握できないが、この話は決着したと言いたげに叔父は腰を上げた。

そうして日差しが差す窓の近くまで歩み寄って行くとおもむろに

胸ポケットからタバコとライターを取り出した。

装飾が詭えてあるジッポーがキンッと音を立て上がった火柱にそつとタバコを近づけた。

「……なあ大和。子供とは無限の可能性を秘めている最も人間として輝きを放つ期間だと僕は思っている」

——っ何処かでそのセリフ……。

「これからの時代に飲まれ行く事になるのはこれからの子供たちだ。教師とはその子供たちをより良い方向に導く存在でなくてはならん」

——思い出は風化しない。

鮮烈に彩られた記憶は尚も輝きを放ち続けている。

【——ねえ。ヤマト君？　あなたは——】

「——短い期間になるかもしれんが、今から体験するこの道も人生の一つの選択肢として考えてもらえれば嬉しい」

そんな親しげな笑みを浮かべた叔父が無性に【先生】の姿と被って見えたんだ……。

市柁町 白陵大学 2001年 12月1日 午前9時00分 日本 神奈川県横浜

Muv-Luv experience

第二話 後編

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2899y/>

Muv-Luv experience

2011年11月14日02時38分発行